西隣研究室の小畑先生

近藤　治

追手門学院大学ご在職時代の小畑龍雄先生の研究室は研究棟三階北側、私の研究室の西隣であった。所用で研究室の先生を尋ねると、濛々たる煙の中で静かにたばこを吸っておられることが多かった。見ると机の上の灰皿は吸い殻が溢れるばかりである。窓を開けておられることは稀であった。愛煙家ということばは先生にこそよくあてはまることばであった。

満杯の灰皿を手にして私の研究室前の廊下を給湯所の方に急ぐ女子学生の姿をよく目にすることがあった。演習の授業に先立って先生の部屋と灰皿をきれいにするためである。その姿は嬉々としているようでさえあった。聞くところによると、先生は女子学生にも大変人気があるということであった。長身で白髪、闊達恬淡な先生に人気がないということの方が不思議である。授業時間よりも早目に来て先生の部屋を掃除することは、学生たちにとって苦痛どころか、むしろ楽しみだったのにちがいない。

小畑先生がご病気だと知ったのは一九八五年の秋、冷い風の吹くなかで受けた集団検診の数日後のことであった。春の検診を受けなかった教職員用に用意されたこの二度目の検診日に、私も先生と一緒に寒い、寒いといいながらレントゲン検査の順番を待っていた。大学のキャンパスで先生とお会いできたのは、奇しくもこの日が最後となってしまった。検査結果の速報を受けられた先生はすぐ入院され、以後大学に来られることはついぞなかったからである。

私は先生のご病気がすぐには信じられなかった。検診の日も、いつもと違わぬお元気さであったし、その夏西ドイツで開かれた国際歴史学会議の様子をお伝えしたら、「私も家内と中国に行ってきました」といわれたばかりではなかったか。容態の芳しくないことを閃聞したとき、先生の研究室の煙が私の脳裡をよぎり、不安をかきたてた。

年が変って入試も終った早春、同僚の上村教授と病院

に見舞いに参上すると、すっかり痩身となられた先生は、しかし笑みを込めながら放射線療法によって病巣の小さくなっていく経過を静かに話された。薬効作用によって髪の毛が抜け落ちることもこぼされた。その後五月の連休明けに再び先生のお宅に伺うと、すでに退院されていた先生は大変お元気そうで、入院前とさして変らぬお姿に見えた。焼物がお好きということをこのときはじめて知り、先生が自ら焼かれた作品の数々を見せていただいた。このお元気さを持続され、見事病気の克服を果されることを心中祈りながら、辞去した。

その後長らく先生には無沙汰を重ねていたが、順調に静養されているものと思い込んでいた。だが今年の二月、貝塚茂樹教授の告別式の帰途、知人たちと小畑先生の強靱さについて話し合ったばかりのところ、それから旬日を経ない内に先生の訃報に接することとなってしまったのである。誠に唐突なばかりに突然の訃せであった。しかしそれは、後日奥様が上村教授と私に述懐されたように、潔さと風雅を旨とされた先生一流の永別の仕方であったのにちがいない。

私が小畑先生のお名前を最初に知ったのは大学に入って間もなくのころであった。羽田明教授の東洋史学の授業は刊行されたばかりの初版『東洋史通論』（創元社）をテキストにされており、小畑先生は宋代史の専門家として共著者の一人になっておられたからである。しかし先生は当時山口大学に在職されており、私にとってはるか遠方の先生に過ぎなかった。その後先生は京都の立命館大学に移られ、そこを定年後はわが追手門学院大学に来られ、研究室が隣合せという最も身近かな状態で、ご指導を受けることになったのである。私にとっては誠にありがたい先生との巡り合わせであった。『東洋史通論』は複雑な東洋史の展開を簡潔に理解しやすく叙述した、当時の大学生用テキストとしては出色の本であったと思う。大学卒業後も私は何度かこの本を取り出してきて参照することがあった。先生もこの本がお気に入りのようで、追手門学院大学で担当される東洋史学の講義にはずっとこれの新版をテキストとして採用されていたようである。

小畑先生との巡り合わせで触れたいもう一冊の本は、宮崎市定先生の『五代宋初の通貨問題』である。小畑先生がご壮健なころ、この本が入手困難なことを話したら、早速その翌日ご自分の蔵書から持参して複写することを許された。製本して書棚に入れたこの複写本を手にする

たびに、私は小畑先生の温顔と篤学を新たにするのである。（一九八七年七月、ロンドンの仮寓にて）